

# スラヴ語スラヴ文学

## ◇教員◇

教授：楯岡求美

助教：古宮路子

## ◇学生◇

学部：2名、修士課程：4名、博士課程：7名

## スラヴ語スラヴ文学研究室とは

スラヴ語スラヴ文学研究室は小さいながらも個性あふれた研究室です。ロシアはもとより、西はドイツに至るまでのヨーロッパ中部、北はバルト海沿岸から南はバルカン半島まで、広くスラヴ世界の言語文化の研究に取り組んでいます。地域の多様さだけではありません。研究分野も、スラヴ諸語比較言語学、ロシア、ポーランド、チェコ、バルカン半島の南スラヴの言語と文学、映画・演劇など諸芸術や文化、フォークロアなど、多様です。その広大で多彩な領域を逍遙し、自分のテーマを見つけ出すことは必ずしも容易ではありませんが、大きな楽しみでもあります。

## 特色

本専修課程の特色は、中世から近代・現代に至るまでの約 1000 年に及ぶスラヴの語学・文学・文化を、幅広く視野に入れている点にあると言ってよいでしょう。スラヴ学においては、文学研究と言語研究は車の両輪のように不可分の関係にあるという考えを持ち、言語と文学の双方の教育と研究に力を入れてきました。したがってロシアのみならず、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ等、さまざまな地域の言語と文化について学習できるよう、授業を開講しています。また映像を扱う授業では、時に専門家や各国の文化広報センターなどにも協力をいただき、みなさんが文化的多様性を具体的に理解できるよう工夫しています。

個人の人生経験は狭く限られたものでしかありませんが、言語の形成・変遷を追うとき、また、作家たちの深い洞察力によって描かれたスラヴ文学のしばしばエキセントリックにも思える世界に入りこむとき、多彩なも

のの見方をシミュレーションのように体験する機会を与えてくれます。

## 国際交流

教員、大学院生、学部生を問わず、学問上の経験や専門分野の違いを超えた自由な交流を尊ぶ気風は、研究室の良き伝統として受け継がれてきました。開かれた研究環境をモットーに、国内外から研究者、作家、アーティストなどの来訪者を積極的に受け入れ、講演会、シンポジウム、映画上映会なども積極的に開催しています。

研究会や読書会では授業とは一味違う「スラヴ文化体験」をすることもできるでしょう。

## 駒場からの進学にあたって

ロシア語の基礎的な学力を身につけておくことが望ましいですが、進学を希望するようになってからロシア語などを勉強しはじめた学生も少なくありません。スラヴ語も印欧語族ですから、英語、ドイツ語、フランス語など西欧諸語についての知識も、スラヴ文化を学ぶ際に強力な武器にもなります。広い視野をもって積極的にさまざまな言語を学び、幅広い知識を習得されるよう、お勧めします。

## 留学

東京大学は、サンクトペテルブルク大学、ワルシャワ大学などスラヴ圏の大学とも協定を結んでおり、留学に際しては個別に相談にのっています。ロシア政府が助成する語学研修などについても情報提供しています。

## 卒業生の進路

出版社や報道関係、一般企業などさまざまな仕事に就く人と、大学院進学を目指す人がほぼ同じぐらいの比率です。近年では修士課程修了後に一般企業へ就職するのも普通になりました。セルビアやカザフスタンなど専門調査員として在外公館に赴任したりする人もいて、選択肢が多様化してきました。

## 研究室のヒストリー

本専修課程は 1972 年に創設された「ロシア語ロシア文学」専修課程を

母体とし、1994年「スラヴ語スラヴ文学」専修課程と名を改めました。といっても、ロシアはスラヴの周辺諸国はもちろん、フランスやドイツとの文化的つながりも深いので、1972年当初からロシアに限らず「スラヴ学」というより広い視点からのアプローチが重要だとする認識があり、スラヴ語スラヴ文学に関する多言語多文化の授業を開講してきました。これまでも、たとえばスラヴ研究室で教鞭をとられた沼野充義先生はポーランドとロシアの文学を中心に、三谷恵子先生はクロアチア、ボスニア、セルビアというかつてのユーゴスラヴィア圏を中心に、スラヴ諸語・諸文化全般の共通性と異なりの歴史的経緯や現代の状況について研究し、言語と文学の社会との関わりといった問題にも関心をもち、文学作品の翻訳も多数手がけています。

チェコ語については、2013年度に授業を開設し、2016年度からは現代文芸論研究室にチェコ文学が専門の阿部賢一先生が赴任したことで、スラヴ研究室でもチェコの言語と文化の研究指導を受けることができるようになりました。

### 授業の一例

**【スラヴ諸語の初級】** 上述のように、本研究室では現在、ロシア語以外に、**ポーランド語**や**チェコ語**、**ブルガリア語**の授業が開講されています。

**【旧ソ連東欧の映像と文学】** / **【スラヴ映像文化研究】** 言語学的な授業や、文学作品の講読・分析を行う授業の他に、ソ連・旧東欧の映画を鑑賞し、その地域の専門家が解説を行い、歴史や文化に対する理解を深めることを目的とする授業もあります。

**新設【ウクライナの多様な文化を学ぶ】** 2022年度から、日本ではこれまであまり取り上げられてこなかったウクライナに焦点を当て、多言語多文化状況への理解を深める授業「ウクライナの多様な文化を学ぶ」を開講しました。「近代ロシア文学史」の授業とともにロシア語を必須としない授業とし、スラヴ研究室以外の学生・院生のみなさんとも、スラヴ地域について学び、考える機会を作る試みです。

授業ではしばしば、他大学や外国からもゲスト講師を招き、広い視野で多角的な研究を行うことを目指しています。

## 最近の学位取得論文

本専修課程で最近、学位を取得した学生の論文も一部ご紹介しましょう。

### 博士論文：

『アレクサンドル・ブローク詩学と生涯』未知谷、2021年（東京大学而立賞、サントリー学芸賞受賞）

『オレーシャ『羨望』草稿研究：人物造形の軌跡』成文社、2021年（東京大学而立賞、日本ロシア文学会賞受賞）

「近代ロシアと「啓蒙」の方法：O.П.コゾダヴレフの文筆活動を通して」

「ボリス・パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモチーフの構造研究」

### 修士論文：

「ナスターシャ・フィリーポヴナの美の二重性：「世界をひっくり返す美」のダイナミズム」

「ガルシン戦争作品群における人々の苦しみの分析」

「ドストエフスキーにおけるアフェクト論研究—感情・情動概念によるアプローチ」

「ヴァルラーム・シャラーモフの短編作品群『コルィマ物語』における自然観」

「ユーリー・ノルシュテインとエドゥアルド・ナザーロフのアニメーション作品における自然描写の比較」

### 卒業論文：

「ゴーゴリ作品におけるペテルブルク表象—「ネフスキイ大通り」を中心に—」

「イヴォ・アンドリッチ『ドリナの橋』における「永続性」と「忘却」

『カラマーゾフの兄弟』イワンの無神論について」

「カレリア共和国と『カレワラ』」

## スタッフからの自己紹介です

以下、研究テーマと授業で扱う内容などについて紹介します。

学生・院生の多様なテーマに対して、丁寧に相談に応じることを心がけ、国内外のつながりのある専門家にアドバイスをもらえるよう、環境を整えています。

**楯岡求美教授**：多民族国家ロシア・旧ソ連圏のロシア語文学、演劇、映画などを研究対象としています。特に 20 世紀初頭のロシア・アヴァンギャルドの時代、戦争や革命などによる大きな社会変動の中で、使い古された表現を捨て、意味と記号の関係を刷新する実験的な表現が探究された時代に興味を持っています。テレビやハリウッド映画などに見られる喜怒哀楽を自然に表現する演技もこの時代のロシアで形作られ、今の私たちの意識や世界観の土台となっています。ユートピアや自分探しを志向し続けるロシア語文化をモデルケースとして、近現代の意識を形作ってきた価値観を相対化するような研究をめざしています。

**古宮路子助教**：ロシア革命前後の文学史研究を専門としています。この時代の文壇では、新しいソ連国家のための新しい芸術を創出しようという機運が高まる中、それぞれが独自の文学理論に立つ諸グループが乱立し、来たる文学の方向性をめぐる論争とヘゲモニー抗争を繰り返すという、極めてダイナミズムに富む様相が生じていました。そうした時代特有の文学の「動き」を明らかにすることが研究のテーマです。特にアーカイヴ研究や草稿研究に力を入れていて、小説の手書き原稿から創作プロセスを解明したり、当時の定期刊行物を手掛かりに文芸ジャーナリズムの動向について考察したりしています。

FB では研究室の企画以外にスラヴ文化に関するいろいろな情報を提供するようになっています。

二次元バーコードがありますのでご利用ください

スラヴ HP



<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/slav/index.html>

スラヴ FB



<https://www.facebook.com/SlavicStudiesUTokyo/>